

「今月の1枚」



写真1
ウバメガシうどんこ病の病徴

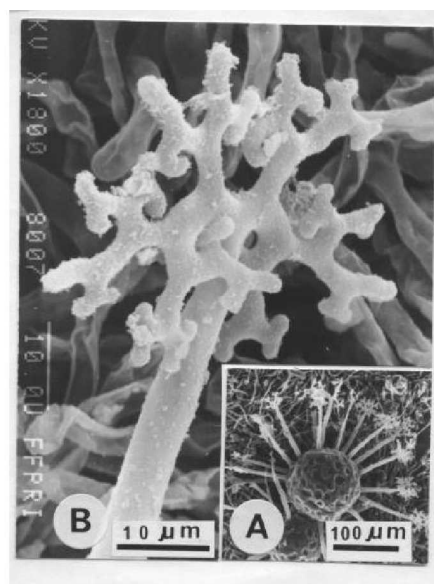


写真2
ウバメガシうどんこ病菌の子のう殻と付属糸の電子顕微鏡写真

病原菌の越冬－うどんこ病－

樹木に病気を起こす病原菌も厳しい冬を乗り越えなくては、翌年、病原菌として活動することができません。

そのため、菌の種類によって様々な越冬の仕方を備えています。

写真1はウバメガシのうどんこ病です。うどんこ病は、葉や若枝の表面がうどん粉を振りかけたようになることからこの病名が付けられています。

このうどん粉のような白いものは、菌糸や分生子（ぶんせいし）と呼ばれる、おもに夏場に作られる孢子などです。

うどんこ病菌の中には、菌糸の形のままで越冬する種類もありますが、ウバメガシうどんこ病菌は、越冬のために子のう孢子（しのうほうし）を作ります。

関東地方では秋に、ここ高知では12月にこの子のう孢子が確認されました。このうどんこ病では、菌糸と子のう孢子の両方で越冬するようです。

病気にかかった葉は、やがて枯れて脱落しますので、菌糸で越冬する種類は、病葉と共に滅びる運命にあります。しかし越冬孢子を作る種類は、別の場所に飛んでいって生き延びるチャンスが広がります。

写真1の矢印の箇所の黒いつぶつぶは、子のう孢子を入れる子のう殻（しのうかく）と呼ばれる容器です。写真2のAの球状のものが子のう殻の全体像です。

子のう殻にはBの写真にあるような、シカの角を連想させる付属糸が付いています。

うどんこ病菌の子のう殻に付いている付属糸は、このようなシカの角状の形のほか、フェンシングの剣みたいな形、ムチのような形など6、7タイプがあり、それでうどんこ病菌の分類学上の属を分けています。

（写真・文：楠木学 写真1は2008年12月25日支所構内で撮影）

（No.180 2009.1.7 掲載）